

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

「見る」

横浜市立生麦中学校 3年 ^{やなぎはら}柳原 ^{ももこ}萌々子

1945年3月26日、沖縄の慶良間諸島に米軍が上陸し、沖縄戦が開始した。

この簡素な一文に、当時どれだけの恐怖や不安が見られたのか。令和を生きる私達のほとんどが、その時を感じることはできません。国同士の戦いに民間人が巻き込まれ、米軍と民間人が接触した唯一の場所、それが沖縄です。特に南部の方は激戦で、多くの住民が命を落としました。東京大空襲や広島・長崎の原爆投下とはまた違った恐怖があった場所です。

今年の5月、私は修学旅行で沖縄へ行きました。2泊3日という短い間でしたが、伊江島での民泊体験を通して横浜とは違った環境での暮らしを知り、充実した時間を過ごすことができました。そんな楽しい思い出も多い中、私が一番印象に残ったのは、1日目に訪れた平和祈念資料館で見たとある写真でした。資料館には沖縄戦に至るまでの歴史や戦争が起こるまでの経緯の展示、沖縄戦体験者の証言などの資料がありました。私は、一つ一つの展示をゆっくり見ながら歩いていました。いつの間にか周りにほとんど人がおらず、同じクラスの友達と静かに回っていました。ふと時計を見ると集合時間が近づいており、時間に間に合うようペースを上げました。その時、友達が「ねえ、ももこちゃん。」と私を呼びとめました。彼女は、1枚の大きな写真を見ていました。その写真には目を閉じ、ぐったりした様子で倒れた数人が写っており、どこか「亡くなっている」ことを感じさせる雰囲気は漂っています。そのフロアには他にも、銃で撃たれた幼い男子の亡骸など、戦争によって殺された人々を写した写真が展示されていました。

戦争は人を殺すのだと、初めて「見た」瞬間でした。

私は今までに何度も戦争について調べたり、ドラマなどの映像を見たりしてきましたが、自分の中のどこかで戦争は遠い過去の話だと思っていたところがありました。しかし、この写真を見て、戦争がすぐ隣にいるかのように感じました。あの写真を見たその瞬間を、私は忘れられないと思います。

「見る」という行為は、私達にとって大きな役割を果たしています。それは実態をもつものに限ったことではなく、元々形のないものを「見」て、心に映すこともできます。「見る」ことで、私たちはいろいろなことをより

はっきりと認識できるのです。

戦時下での出来事は、私達若者には「見る」機会があまり多くありません。では、みなさんは「見せる」活動をしている人達を知っていますか？沖縄・八重瀬町の向陽高校の生徒達は自らがガイドとなり、同世代の生徒達に沖縄戦について伝える取り組みをしているそうです。ガイドをした生徒は、「ガイドをする前は不安もあったけど、練習をする中で学んだことを他の人にも伝えていこうという思いが強くなった。」と振り返っており、自らが伝える側になるという意識が深まっているのが印象的でした。このように、自ら学び、「見せる」側になる活動している人がいるのです。

歴史は、時間が経つにつれ私達から遠のいていきます。過去のものとして、私達の記憶から薄れ、劣化していつてしまうのです。

私達はそんな歴史を繋ぎ止め、次の世代へ渡していかなければいけません。中には戦争のように「見る」こと自体、あまり多くないものもあるでしょう。しかし、そんな私達に「見せる」活動をしている人々がいるということを知り、その記憶を繋げてほしい。きっと、私達の代で戦争体験者の話を実際に聴くことは最後となるでしょう。だからこそ知ってほしい。「見」てほしい。私達の見てきた記憶を次の世代の記憶へと連鎖させていくことが、戦争を感じることでできない私達の唯一の役目なのだから。そう、心にとどめ、戦争を「見」てみてはどうでしょうか。

「見る」ことは、私達の記憶の糧なのです。